

大鋸町遺跡

(第32地点)

～元吉田町地内建売住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～



2017

水戸市教育委員会

大鋸町遺跡

(第32地点)

-元吉田町地内建壳住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2017

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市の東部に位置する吉田台地には、本書で報告する大鋸町遺跡をはじめ薬王院東遺跡、国指定史跡吉田古墳などの魅力的な遺跡が存在しています。このことから本地区には、古くから連綿と人々の生活が営まれるとともに、縄文時代、古墳時代、古代において重要な地域であったことが判明しつつあります。

一方、吉田台地の一画をなす大鋸町周辺では、近年の都市化に伴い、周辺に位置する遺跡の様相が大きく変わりつつあり、そのため、本市教育委員会では、吉田台地に今も眠っている遺跡の実像を後世へと伝えるため、文化財保護法並びに関係法令に基づき遺跡の保護保存に努めているところです。

さて、このたび実施した発掘調査は、建売住宅建築工事に伴う記録保存を目的とした発掘調査であります。広範囲にわたる近世の溝跡や井戸跡のほか、古代以降の遺物も多く出土し、大変貴重な成果が得られました。

ここに刊行の運びとなりました本書を契機として、かけがえのない貴重な文化財に対する愛着を深めていただくとともに、学術研究の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして多大なる御理解と御協力を賜りました関係各位に、心から感謝を申し上げます。

平成 29 年 6 月

水戸市教育委員会
教育長 本多 清峰

例　　言

- 1 本書は、水戸市に所在する大綱町遺跡（第32地点）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は建売住宅建築工事に伴い、事業者である茨城グランディハウス株式会社の委託を受け、水戸市教育委員会の指導の下、有限会社毛野考古学研究所が行った。
- 3 調査概要及び調査組織は、下記の通りである。

所 在 地 水戸市元吉田町2366-1, 2367-1番地

調 査 面 積 226.75 m²

調 査 期 間 平成28年11月1日～平成28年11月12日

調査主体者 有限会社毛野考古学研究所茨城支所（支所長　土生朗治）

調査担当者 早川麗司（有限会社毛野考古学研究所）

測量・空撮 小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）

調査参加者 宇留野広大　宇留野初男　菊池有里子　八巻省三　濱敏子　平田桂子　安井忠一

調査指導 水戸市教育委員会教育長 本多清峰

水戸市教育委員会教育部長 七字裕二

水戸市教育委員会教育部歴史文化財課長 白石嘉亮

水戸市教育委員会教育部歴史文化財課水戸市埋蔵文化財センター所長 関口慶久

水戸市教育委員会教育部歴史文化財課水戸市埋蔵文化財センター主幹 新垣清貴

- 4 整理期間と整理担当、整理技師は以下のとおりである。

整 理 期 間 平成28年11月14日～平成29年6月30日

整 理 担 当 海老澤稔（有限会社毛野考古学研究所）

整 理 技 師 金谷奈央　大津智美

- 5 本書は海老澤・新垣が分担して執筆し、関口・新垣の指導のもと、海老澤が編集した。

- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管する。

- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・各位より御指導・御協力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表する次第です。（敬称略）

茨城グランディハウス株式会社、茨城県教育庁総務企画部文化課

凡　　例

- 1 本書に記している座標値は、世界測地系に基づく。挿図の内、平面図の方位記号は座標北を、土層堆積断面図の水準標高の数値は海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。
- 2 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所 色票監修 2007年版）に準拠する。
- 3 遺構平面図及び土層堆積断面図の縮尺は、1/40, 1/60, 1/200 を基本とし、各図にスケールを明示した。
- 4 遺物実測図の縮尺は、土器類を1/3で掲載し、各図にスケールを明示した。
- 5 遺物写真的縮尺は実測図と同じである。
- 6 実測図・一覧表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SB- 挖立柱建物跡 SD- 溝跡 SK- 土坑 SE- 井戸跡 P- ピット
土層 K- 撥乱
- 7 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。
 - (1) 計測値の単位はm, cm, gで示した。なお、現存値はく >を、推定値は()を付して示した。
 - (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号は各遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- 8 遺構の主軸は、長軸（径）とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N -10° - E）。

目 次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の方法	2
第3節 調査・整理の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 発見された遺構・遺物	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構・遺物	9
1 挖立柱建物跡	9
2 溝跡	12
3 井戸跡	18
4 土坑	19
5 ピット	20
6 遺構外出土遺物	22
第Ⅳ章 まとめ	25
第1節 土地利用の概観	25
第2節 当遺跡における近世遺構と江戸街道	26
引用・参考文献	
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図 第32地点位置図	1	第13図 第1号井戸跡出土遺物実測図	19
第2図 大鋸町遺跡周辺の遺跡	5	第14図 第2号井戸跡実測図	19
第3図 基本土層図	9	第15図 第1号土坑実測図	19
第4図 第32地点調査区全体図	10	第16図 第2号土坑実測図	20
第5図 第1号掘立柱建物跡実測図	11	第17図 第1号ピット実測図	20
第6図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図	11	第18図 第1号ピット出土遺物実測図	20
第7図 調査区1 全体図	12	第19図 第64・65号ピット実測図	20
第8図 調査区2 全体図	13	第20図 第64・65号ピット出土遺物実測図	21
第9図 調査区3 全体図	14	第21図 遺構外出土遺物実測図	23
第10図 第1～6号溝跡実測図	16	第22図 大鋸町遺跡(第32地点)と 近世江戸街道との位置関係	27
第11図 第1～6号溝跡出土遺物実測図	17		
第12図 第1号井戸跡実測図	18		

表目次

第1表 大鋸町遺跡と周辺遺跡一覧表	6	第6表 第1号ピット出土遺物観察表	21
第2表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	11	第7表 第64・65号ピット出土遺物観察表	21
第3表 溝跡出土遺物観察表(1)	14	第8表 ピット計測表	22
第4表 溝跡出土遺物観察表(2)	17	第9表 遺構外出土遺物観察表	22
第5表 第1号井戸跡出土遺物観察表	18	第10表 出土遺物集計表	24

写真図版目次

図版1 1 調査区遠景(南西から)		図版3 1 第1号溝跡 完掘状況(北から)	
2 調査区近景(南東から)		2 第2号溝跡 完掘状況(北から)	
図版2 1 調査前状況		3 第4号溝跡 完掘状況(南西から)	
2 調査区1 全景		4 第1号井戸跡 土層堆積状況 (西から)	
3 調査区2 全景		5 第1号井戸跡 完掘状況(東から)	
4 調査区3 全景		6 調査区1 終了状況(西から)	
5 調査区1・3全景		7 調査区2 終了状況(西から)	
6 基本土層		8 調査区3 終了状況(西から)	
7 第1号溝跡 確認状況(南から)		図版4 出土遺物写真	
8 第1号溝跡 土層堆積状況(西から)			

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

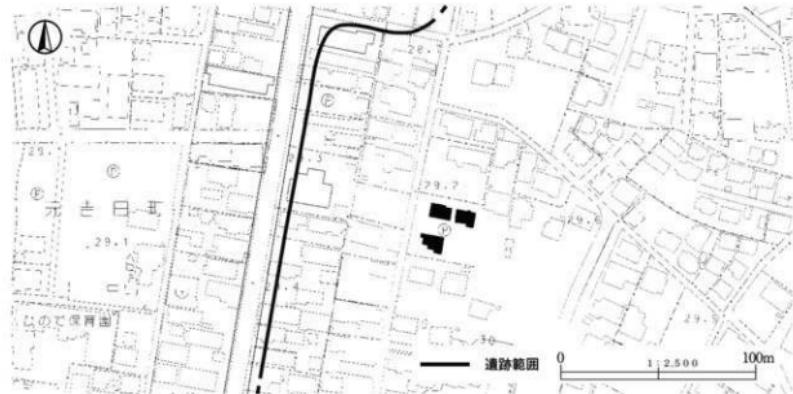
平成28年6月29日付で、建売住宅建築工事に伴い、岩城幸子（以下「事業者」という）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教理第863号）照会があった。

照会地である水戸市元吉田町2366-1, 2367-1番地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「大綱町遺跡」の範囲に該当していることから、市教委は事前の試掘・確認調査の実施と、工事着手の60日前までに文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が必要である旨、事業者あて回答した。

試掘・確認調査は、平成28年7月12日（第1次）、平成28年8月3日（第2次）の2回にわたり実施した。第1次調査は、今般開発地内の埋蔵文化財の有無の確認の為に実施され、中世の井戸跡1基、溝跡1条、近世の井戸跡1基、溝跡1条が検出された。溝跡に関しては生垣痕等に見られる溝状遺構と推定でき、開発地内において活発な土地利用の状況が判明したことから、地下に埋蔵文化財が所在する旨を平成28年7月20日付で事業者あて回答した（教理第864号）。

その後、事業計画が進んだことから、具体的な配置計画に基づき第2次調査を実施した。その結果、建物建築予定地及び道路敷設予定地において、井戸跡1基、中世から近世の溝跡3条、土坑1基、ピット3基が、新たに検出された。第1次調査同様、開発地内における濃密な埋蔵文化財の分布が明らかであり、計画地内全体にわたり埋蔵文化財が存在することが確認され、平成28年8月10日付で事業者あて回答した（教理第1040号）。

その後、茨城グランディハウス株式会社 代表取締役 幕内 潔を事業者とし、建売住宅建築を目的とした「埋蔵文化財発掘の届出」が提出されたため計画案を基に、確認された埋蔵文化財を保護することについて再三にわたり事業者との協議を重ねた。



第1図 第32地点位置図 (1:2,500)

その結果、設計変更等による遺構の保護が困難であり埋蔵文化財の損壊が不可避な状況であることから、市教委は平成28年9月23日付けにて茨城県教育委員会(以下、「県教委」という)へ届出を進達した(教埋第1181号)。これを受けて、県教委教育長から平成28年9月30日付け文第1645号にて工事着手前に記録保存を対象とした本発掘調査を実施すること、また調査の結果、重要な遺構等が確認された場合には、その保存等について別途協議を行うよう、通知があった。

その後、平成28年9月28日付事業者および有限会社毛野考古学研究所、市教委との間で三者協定が結ばれ、平成28年11月1日から平成28年11月12日まで、事業者の全面的な協力のもと、市教委の指導により、毛野考古学研究所が埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。
(新垣)

第2節 調査・整理の方法

発掘調査 試掘・確認調査結果に基づいて、遺構検出作業を行った。まず、重機によって表土下30～40cmまで掘削し、その後人力による遺構確認を行い、写真撮影と概略図を作成した。グリッドは国家座標(世界測地系)に基づき、調査区内に5m四方に杭を設置した。遺構は、平面プラン確認の状況から4区画のベルト設定もしくは半載をし、土層堆積状況の確認・図化、撮影を行った。遺物は、各遺構ごとに必要に応じてトータルステーションを用いて出土位置を記録した。なお、出土層位等が明らかな場合は、層位を優先して取上げた。また、溝跡の調査においては、遺構確認面から深さ10cm単位で土器小片を取り上げる方法も併用した。

遺構写真は、調査の進捗に併せて随時撮影し、35mm白黒・35mmカラーリバーサル、500万画素相当のデジタルカメラで対応した。

整理作業 出土した遺物は、全て洗浄した後、注記は手作業で、ポスターカラー(白)を用いて行った。注記の記入項目は、遺跡番号・調査地点・遺構番号・遺物番号・出土年月日である。復元作業には、溶剤系接着剤(セメダインC)を用いて接着し、欠落部分についてはエボキシ系樹脂を用いて充填した。接合・復元作業終了後、全ての遺物について時期・種別・器種・部位・文様の有無等で分類し、遺構毎・グリッド毎にその総点数と総重量を計測し記録した。記録後、報告書掲載遺物を抽出し、写真撮影及び実測図作成を行った。実測図作成は拓本・実測・デジタルトレースを順次行い、デジタルデータによる図版の作成・編集を行った。

なお、本文執筆・編集にはAdobe InDesign CS2を使用した。

第3節 調査・整理の経過

発掘調査は平成28年11月1日から11月12日まで実施した。経過は以下のとおりである。

11月1日 重機による表土除去を開始する。発掘器材を搬入する。調査区3 表土除去終了。

11月2日 調査区1・2 重機による表土除去終了。遺構確認作業を行う。調査区3 第1・2号溝跡、第1・2号井戸跡掘り込みを開始する。

11月4日 調査区1・2 掘り込みを開始する。

- 11月5日 第1・4号溝跡の土層堆積状況図を作成する。
- 11月7日 第1～4号溝跡、第1・2号井戸跡、第1・2号土坑掘り込み終了。調査区1～3の調査終了状況を撮影する。
- 11月8日 空中撮影前の清掃。市教委終了検査。
- 11月10日 ドローンによる空中撮影。トータルステーションによる全測図を作成する。
- 11月12日 調査区埋め戻し、発掘調査を終了する。
- 整理作業は平成28年11月14日から平成29年6月30日まで実施した。経過は以下のとおりである。
- 11月14日 遺物洗浄作業を開始する。
- 11月21日 遺物注記作業の開始と並行して、遺構図の修正を行う。
- 12月12日 遺物の接合・復元を行う。その後、遺物分類・選び出しを行う。
- 1月10日 遺構図のトレースに着手するとともに、遺物の写真撮影を行う。
- 2月6日 遺物実測を開始するとともに、観察表の作成を行う。
- 3月6日 遺構原稿の執筆に着手し、遺物実測図のトレースに移行する。
- 4月24日 版組みをし、報告書を入稿する。
- 5月15日 報告書の校正を行う。
- 6月30日 報告書を納本する。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回の調査区である大鋸町遺跡（第32地点）は茨城県水戸市元吉田町2366-1番地ほかに所在する。水戸市は、関東平野の北東部を占める常総台地、茨城台地北部に位置する。本市は太平洋岸に近接するが、東部は大洗町・ひたちなか市に接し、海岸には面していない。市域北部は八溝山地を横切る那珂川下流にのぞみ、茨城台地の一部水戸台地の北西端には、八溝山地外縁の丘陵が続いている。

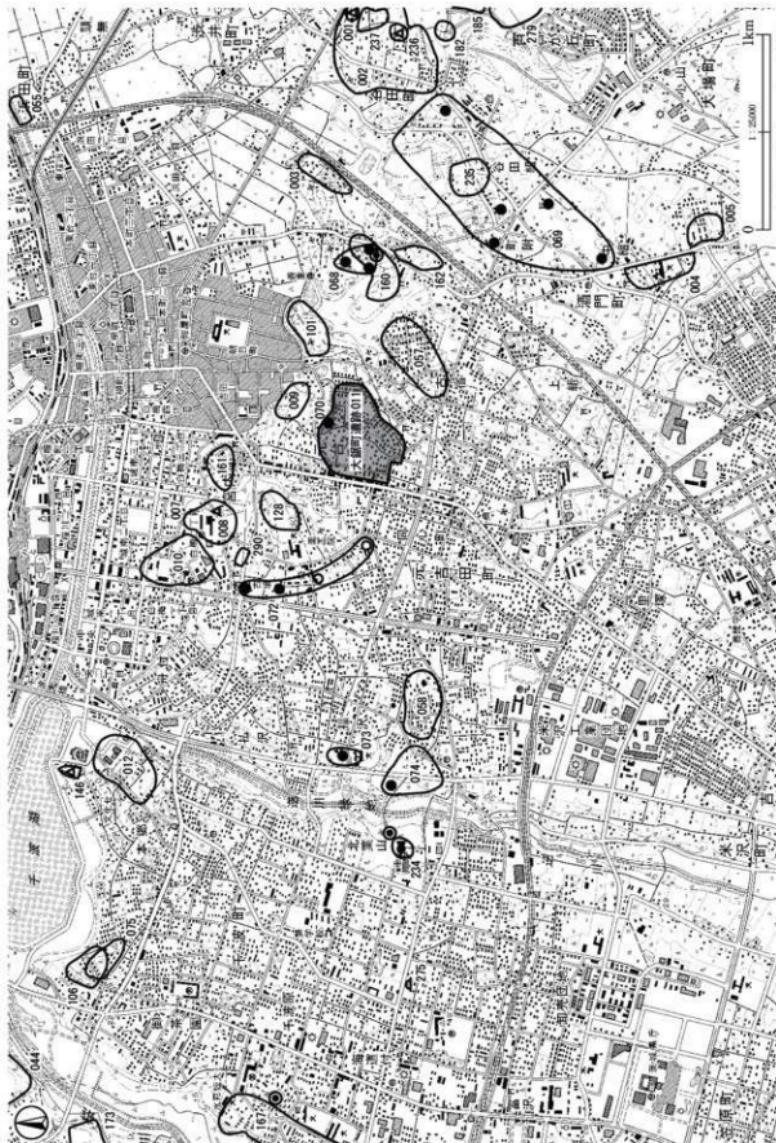
周辺地形 周囲の地形に目を移すと、北部の阿武隈山地に属する多賀山地は、太平洋岸に海岸段丘からなる多賀海岸平野を形成し、阿武隈山地から分かれる久慈山地と八溝山地の間には、久慈川の浸蝕谷が形成されている。さらに、八溝山地に属する鶏足山塊と筑波山塊の間には、笠間の盆地が存在する。他方、水戸の南部には常総の平野が展開し、関東平野の一部をなす。このように地形的には本市を南部の平野と西部の笠間の盆地、北部の久慈川の谷、多賀海岸平野などを結ぶ基点として位置付けることができる。すなわち歴史的にいえば、本市域が水陸交通の拠点であるといえる。

地形区分 水戸市の地形は、北西部から東部に流れる那珂川を中心に構成される沖積層の低地地区、茨城台地の北東部をなす水戸台地（上市台地・緑岡台地など）と呼ばれる洪積層の台地、鶏足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵地区の三つに区分される。洪積層台地のうち、那珂川と湖沼川との合流点に向かって突き出た台地は、特に吉田台地と呼称される。下市と呼ばれる市街地の東端で那珂川に注ぎ込む桜川の支流にあたる逆川によって、千波台地と分けられた当該台地は、那珂川右岸の狭い沖積層の低地帯をのぞみ、その低地帯から樹枝状に狭い支谷が入り込んで、地形は複雑である。当該遺跡は、その狭い支谷の一つに面した標高28m前後の台地縁辺部に立地する。その複雑な地形と相俟って、先土器時代から近世にかけて多くの遺跡が立地するが、近年、ニュータウン建設などをはじめとした宅地化が急速に進んでおり、往時の景観は次第に失われつつある。

第2節 歴史的環境

先土器時代～繩文時代 該期の遺跡は吉田台地東部を南北に開析する石川川両岸にまとまって分布する。当遺跡（011）の南東約4.0kmに位置する森戸古墳群では、台形様石器と考えられる石器が出土しており注目される。当遺跡では、橋本編年IIc期（橋本2002）の尖頭器が出土している。石川川右岸の下入野町地区および当遺跡の南東約2.5kmの百合ヶ丘町地内においては、先土器時代から繩文時代移行期の神子柴型尖頭器が採集されている。（川口2008a）。

繩文時代になると、ヤマトシジミ主体の内湾性汽水域貝塚が確認され、標高10m前後の低い段丘面に、前期の谷田貝塚（001）と仲通り貝塚（236）が隣あって位置する。中期では吉田貝塚（008）があり、不明な点が多いものの、隣接する水戸南高校遺跡（007）でかつて高校造成時に多量の遺物が出土したことから考慮すると、両遺跡で一つの拠点的集落の可能性もある。谷田貝塚の隣接地である下ノ内遺跡（237）では中期～晩期の土器・石器・骨角器が多量に検出され、拠点集落の存在を予測させる。吉田貝塚付近



第2図 大堀町遺跡周辺の遺跡（1:25,000）

第1表 大鋸町遺跡と周辺遺跡一覧表

番号	名称	種別	所在地	時代	備考
001	谷田貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前・後・晚)	昭和47年発掘調査
002	谷田遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(前～後)・古墳(後)	
003	塙坪遺跡	集落跡	酒門町塙坪	弥生・奈良・平安	
004	酒門小学校遺跡	集落跡	酒門町1445	縄文(中・後)	昭和35年発掘調査, 淹滅
005	酒門東原遺跡	集落跡	酒門東原	縄文(後)	淹滅
007	水戸南高校遺跡	集落跡	白梅2丁目	縄文(早～後)・弥生・古墳	淹滅
008	吉田貝塚	貝塚	元吉田町井坂	縄文(中)	一部消滅
009	安楽寺遺跡	集落跡	元吉田町安楽寺	縄文(中・後)・奈良・平安	
010	お下屋敷遺跡	集落跡	元吉田町お下屋敷	縄文(前～後)・弥生(後)・古墳・平安	淹滅
011	大鋸町遺跡	集落跡	元吉田町2309外	先土器・縄文(早・晚)・弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	昭和63年, 平成16～19・20・28年発掘調査
012	下本郷遺跡	集落跡	千波町下本郷	縄文(中)	淹滅
044	見川塙畠遺跡	集落跡	見川1丁目塙畠	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	
055	吉沼遺跡	集落跡	浜田町上坪外	古墳・奈良・平安	
057	横宿遺跡	集落跡	元吉田町古宿外	縄文(早)・弥生(後)・古墳(前)	
058	米沢町遺跡	集落跡	元吉田町荒谷	弥生(後)・古墳	淹滅
068	酒門古墳群	古墳群	酒門町台	弥生(中)・古墳	前方後円墳1, 円墳2
069	谷田古墳群	古墳群	酒門町町附外	古墳	前方後円墳1(2), 円墳5
070	大瀬町古墳	古墳	元吉田町大瀬町	古墳	円墳0(1), 淹滅
072	吉田古墳群(国史跡吉田古墳)	古墳群	元石川町東組	古墳	平成17～20年発掘調査 多角形墳1, 方墳1, 淹滅2
073	弘沢古墳群	古墳群	千波町弘沢	古墳	円墳0(2), 淹滅
074	福沢古墳群	古墳群	米沢町福沢	古墳	円墳3(4)
075	千波山古墳群	古墳群	千波町千波山	古墳	前方後円墳1, 円墳2
101	吉田城跡	城館跡	元吉田町2733	中世	
106	千波山遺跡	集落跡	千波町千波山	縄文	淹滅
128	栗王院東遺跡	集落跡	元吉田町599-2外	縄文(中)・弥生(後)・奈良・平安	平成元年発掘調査
146	柳崎貝塚	貝塚	千波町柳崎	縄文(早・前)	
160	酒門台遺跡	集落跡	酒門町台11外	弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	
161	吉田神社遺跡	集落跡	宮内町3193-2	弥生(後)・古墳	
162	荷鞍坂遺跡	古墳／集落跡	酒門町242-1	縄文(早・後)・弥生(後)・古墳(後)・奈良・近世	平成20年発掘調査 円墳1
167	香掛遺跡	集落跡	見川町香掛2563外	古墳	淹滅
173	見川城跡	城館跡	見川町3丁目	中世	
182	西谷津遺跡	集落跡	六反田町西谷津	古墳・奈良・平安	
185	薄内遺跡	集落跡	六反田町薄内	先土器・縄文(中)・弥生(中・後)・古墳・奈良・平安	平成20年発掘調査
234	笠原古墳群	古墳群	笠原町993外	古墳	前方後円墳1, 円墳1
235	町付遺跡	集落跡／道路跡	酒門町町付	縄文(早)・弥生(後)・古墳(前)・平安・中世・近世	平成20年発掘調査
236	仲通り貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前)	
237	下ノ内遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(晚)	
275	笠原南塚	塚	笠原町1044-8	近世	
279	道西遺跡	集落跡／墳墓	六反田町道西	先土器・縄文・弥生・奈良・平安	方形周溝墓3 平成16年発掘調査
290	東組遺跡	集落跡	元吉田町東組	縄文(早)・弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世	古代火葬墓1 平成20年発掘調査

の薬王院東遺跡（128）では、中期の堅穴状造構や早期沈線文系、後期安行式の土器が確認されている。当遺跡では早期撚糸文系・沈線文系の土器、中期阿玉台式～後期堀之内・安行式、晚期前浦式までの土器が出土している。全体的には早期～晚期まで長い活動が窺えるが、調査面積が狭く、集落は不明な点が多い。

弥生時代 後期後半の十王台式期が主体である。薬王院東遺跡・大鋸町遺跡・お下屋敷遺跡（010）・町付遺跡（235）で集落跡が確認され、半径1km圏内に集中する傾向が窺える。土器の細別型式から判断すると集落移動が捉えられるという（色川2008）。また、低位段丘上の薄内遺跡（185）では、前期末から中期初頭に比定される土器破片と中期末に比定される土器破片がまとまって確認されており、注目に値する。

古墳時代 前期集落として、大鋸町遺跡・お下屋敷遺跡・薄内遺跡・町付遺跡・東組遺跡（290）などがあり、弥生時代後期後半の立地を踏襲する。中期の遺跡は極めて希薄だが、当遺跡で6軒の住居跡が確認され、9点の古式須恵器（TK208～TK47）が出土し、その拠点的性格が特筆される。後期集落はお下屋敷遺跡など、各地に展開している。

前期古墳は那珂川を遡った市北部の飯富町・藤井町に前方後方墳や前方後方形周溝墓が集中する。百合ヶ丘町の道西遺跡（279）では、平成16年の調査時に前期の方形周溝墓が2基発見された。大洗町城の丘陵上にも坊主山古墳（前方後円墳：63m）・日下ヶ塚（常陸鏡塚、前方後円墳：105.5m）・車塚古墳（円墳：88m）の3基が築造されている。中期古墳は那珂川右岸に面した上市台地北縁、当遺跡の西約5.4kmに愛宕山古墳群があり、5世紀前葉の愛宕山古墳（前方後円墳：140m）と煙滅した姫塚古墳（前方後円墳：58m）が存在する。愛宕山古墳は県内第3位の大きさを誇り、黒斑を持つ埴輪が多数採集されている。

後期から終末期にかけては、吉田台地の中央部を解析する涸沼川の一支流である石川川と、那珂川低地に挟まれた吉田台地北半部に古墳群が密集する。古墳群は、いずれも両岸に沿う低地帯から樹枝状に入り込む小谷津に面した台地縁辺部や平坦地に立地し、低地からは少し奥まった所に築造されるのが特徴である。後期には吉田台地に酒門台古墳群（068）と大串古墳群が展開する。酒門台古墳群では前方後円墳を思わせる盛土と円墳2基が確認されている。県道中石崎水戸線に面した宅地内には石室の天井石が残存し、近隣の畑地では円筒埴輪片が採集されている。大串古墳群は当遺跡の南東約6.0kmに位置する。煙滅したものを含め、前方後円墳・円墳・方墳など10基程の構成と考えられている。前方後円墳からは五獸鏡・銅環・直刀・鉄鎌・木製壺鑑などが出土している。大串古墳群に接して北屋敷古墳群があり、円墳2基が調査されている。第1号墳では横穴式石室から直刀や小刀などが、第2号墳では多くの円筒埴輪・形象埴輪が出土している。

終末期は那珂川右岸の北部にニガサワ古墳群・西原古墳群・大井古墳群、北東部に白石古墳群と権現山横穴墓群がある。吉田台地には谷田古墳群・福沢古墳群・払沢古墳群などが広がる。福沢古墳群（074）は円墳3基が残存し、隣接する払沢古墳群（073：煙滅）とは同一の古墳群と考えられる。当遺跡から約2.0km東に位置する谷田古墳群（069）は、前方後円墳1基と円墳5基が現存する。当遺跡に隣接する吉田古墳群（072）は装飾古墳として学史的に有名な第1号墳「吉田古墳」を含む古墳群である。2基が現存し、かつては4基あったと聞いている。なお、第1号墳の周溝からは隣接古墳から流れ込んだ

とされる円筒埴輪が出土しており、吉田古墳群は遅くとも6世紀から構築がなされていたと考えられる。

奈良・平安時代 上市台地北縁部に「台渡里官衙遺跡群」が展開する。郡寺とされる台渡里廃寺跡や、推定郡衙正倉院の台渡里官衙遺跡長者山地区、郡衙あるいは河内駅家関連遺跡とされる台渡里官衙遺跡南原地区を筆頭に、郡庁・正倉・郡寺・集落が一体集中化した那賀郡中枢域として機能したようである。対岸には河内駅家と推測されている田谷廃寺跡・白石遺跡が位置する。また、大串遺跡第7地点では、郡衙正倉別院とされる掘り込み総地業礎石建物・正倉を区画する大型のV字溝・多量の炭化米が検出された大型床東掘立柱建物跡などが確認されている。隣接する梶内遺跡は100軒を超す集落で、綠釉・灰釉陶器や墨書き土器・円面鏡などが出土した。川口武彦は大串遺跡から南東約2.3km潤沼川左岸の平戸町に推定できる平津駅家について、駅家機能を大串遺跡と分担していた可能性を言及している（川口2008b）。町付遺跡では那賀郡衙と平津駅家とを繋ぐ伝路に想定される道路状遺構が検出されている。弘仁3（812）年には河内駅家は廃止され、10世紀第1四半期には台渡里廃寺も廃絶するという。律合体制が崩壊するなか、9世紀以降には吉田神社が隆盛し、10世紀前半には吉田郡が那賀郡から独立している（水戸市史編纂委員会）。8～9世紀代の集落は、当遺跡で堅穴建物跡30軒、薬王院東遺跡で堅穴建物跡38軒が検出されるなど集住傾向があり、9世紀後半には道西遺跡など小規模集落の増加が窺えるという（渥美2008）。吉田神社を拠点とした半径1kmの扇状範囲には東組遺跡・大郷町遺跡・薬王院東遺跡がまとまる。7世紀後半の拠点集落を継続利用した官衙・駅家・寺院・集落の複合遺跡群に対し、8世紀以降に開発あるいは再開発された吉田地区を基盤として成立したのが、吉田神社・薬王院などの在地有力寺社勢力なのであろう。

中世 当遺跡から北東へと延びる細長い舌状台地上に吉田城（101）がある。常陸大掾氏系の吉田氏が平安末期に館を構えた伝承がある。吉田氏とその一族の石川氏・馬場氏は鎌倉御家の地頭職として在地支配を行った。戦国期には佐竹氏が水戸城を居城とし、拡張・整備を実施した。当遺跡からは青磁・白磁・かわらけなどが出土し（平成16年調査）、中世の堀も確認されている（平成20年調査）。

近世 佐竹氏の秋田移封、武田信吉の入封を経て、慶長14（1609）年徳川頼房の入封をもって、水戸徳川家が成立する。当遺跡の西約0.5kmには近世の江戸（水戸）街道が南北に走り、吉田神社を経由して下市へ至る。水戸藩をはじめ東北諸藩が参勤交代に利用する幹線道路として機能していたようで、字町附から街道筋までには、同心町、古宿などの地名・字名が残っている。

※ 本章の「遺跡の位置と環境」については、当遺跡についての報告である水戸市埋蔵文化財調査報告第27集「大郷町遺跡（第8地点）」（下記文献）を引用し、その後の知見を加え記載した。

石丸敦史 関口慶久 渥美賢吾 2009『大郷町遺跡（第8地点）宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第27集 水戸市教育委員会 島帆ハウス株式会社 有限会社毛野考古学研究所

第Ⅲ章 発見された遺構・遺物

第1節 基本層序



第3図 基本土層図

調査区南西部の調査区3, E 2区北壁で層序を確認した。

第1層はローム小ブロックを少量、小礫をわずかに含む黒褐色土である。粘性・締まりとともに弱い。後世に整地された土層である。層厚は 50 ~ 60 cm である。

第2層はローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含む黒褐色土で、旧表土である。粘性・締まりは普通で、層厚は 15 ~ 20 cm である。

第3層は今市・七本桜軽石を少量含む明褐色のソフトローム層である。粘性・締まりはともにやや強く、層厚は 30 ~ 36 cm である。本層上面が当遺跡の遺構確認面である。

第4層は褐色のハードローム層である。微量の白色粒子を含んでおり、粘性はやや強く、締まりは強い。層厚は 37 ~ 42 cm である。

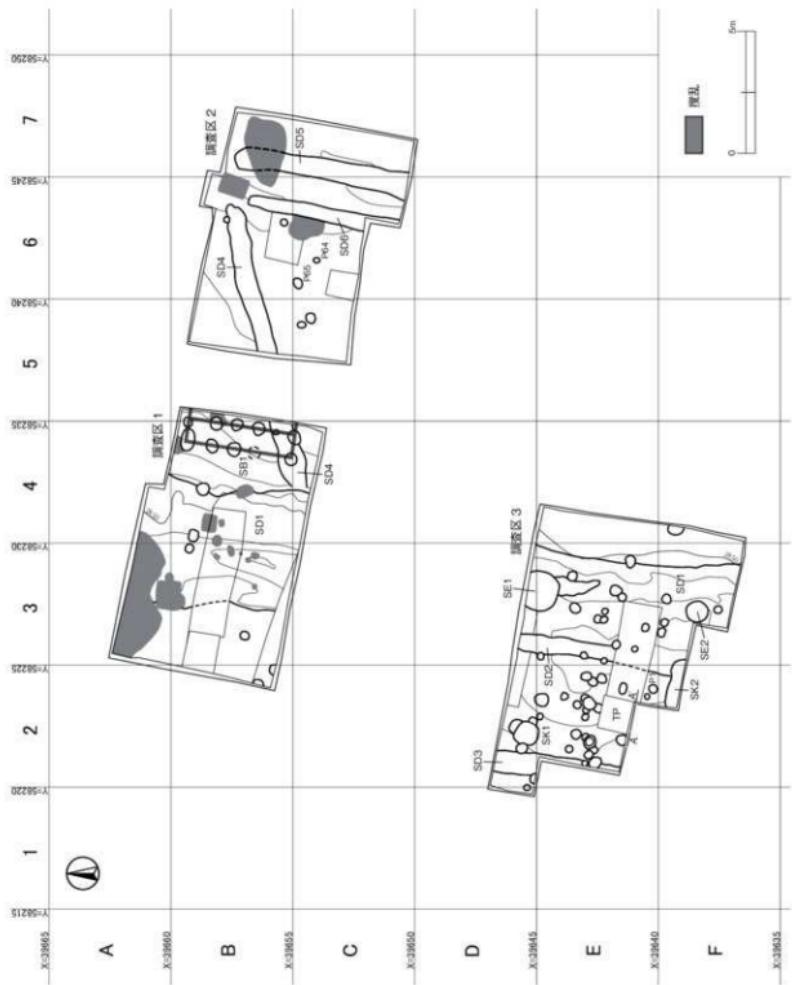
第5層にはにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。微量の炭化粒子を含んでおり、粘性・締まりともに強い。層厚は 38 cm 以上である。

第2節 遺構・遺物

1 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第5図）

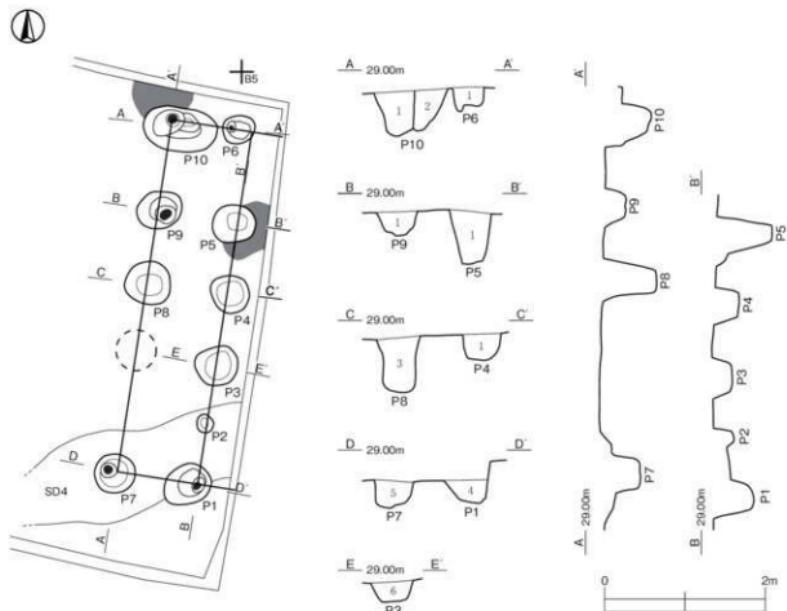
位置 調査区北西部の調査区1 B 4区、標高 29.0 m の台地中央部に位置している。 **重複関係** 第4号構跡を掘り込んでいる。 **規模と構造** 桁行 4間、梁行 1間以上で、西側に庇を持つ建物跡である。桁行南側柱間の間隔があり、入口として利用された可能性がある。桁行方向は N - 7° - E の南北棟である。柱間寸法は桁行 0.95 ~ 2.1 m (3 ~ 7 尺) で、梁行 1.2 m で柱筋はほぼ揃っている。 **柱穴** 主柱穴 9か所。補助柱穴 1か所。P 1・P 3~P 10 は主柱穴で、P 2 は補助柱穴である。平面形は円形または橢円形である。長径 45 ~ 95 cm、短径 35 ~ 60 cm で、深さは 25 ~ 60 cm である。 **覆土** ロームブロック



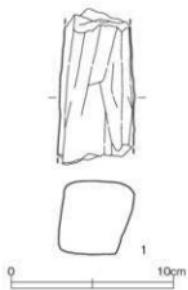
第4図 第32地点調査区全体図

などを含む層が一挙に堆積していることから、埋め戻されている。
脚状の土製品がP-4の確認面から出土している。

遺物出土状況 断面四角形の支所見 柱穴の状況から倉庫と考えられるが、時期を決定できる遺物がなく時期は不明で、第4号溝を掘り込んでいることから近世以降で、第1～3号溝跡などの走向と主軸方向がほぼ同じであることから、それらに関連する建物と考える。



第5図 第1号掘立柱建物跡実測図



第6図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第2表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第6図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
1	支脚	(10.6)	4.6	(4.5)	219.5	長石・石英・雲母・チタード	外:橙 内:明赤	型に入れ作成。断面四角形。柱窓	P4 植土上層	



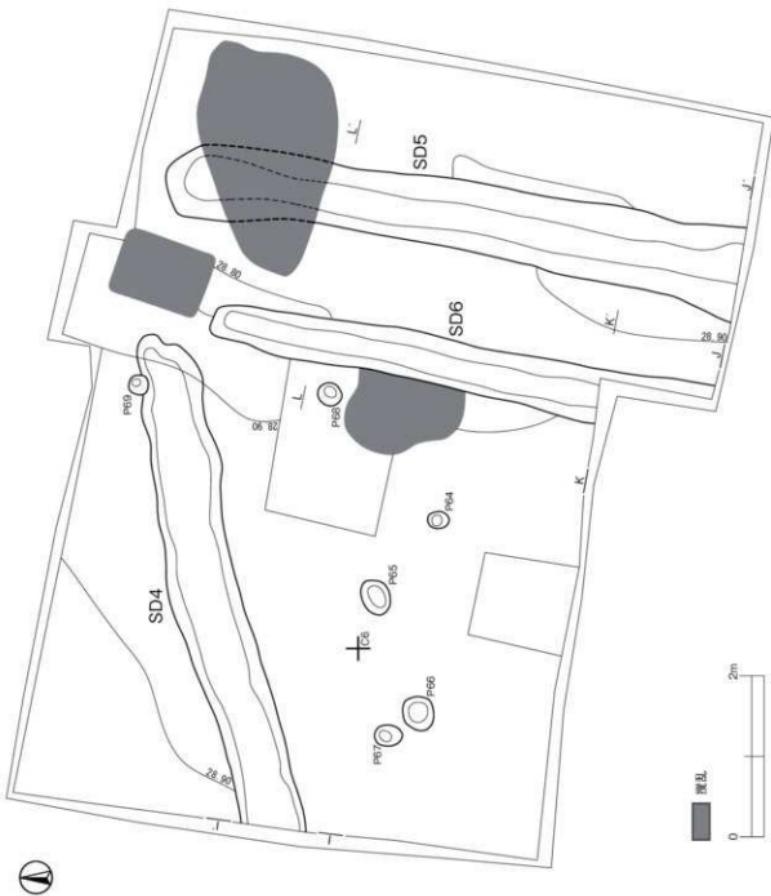
第7図 調査区1 全体図

2 溝跡

第1号溝跡 (第7・9・10図)

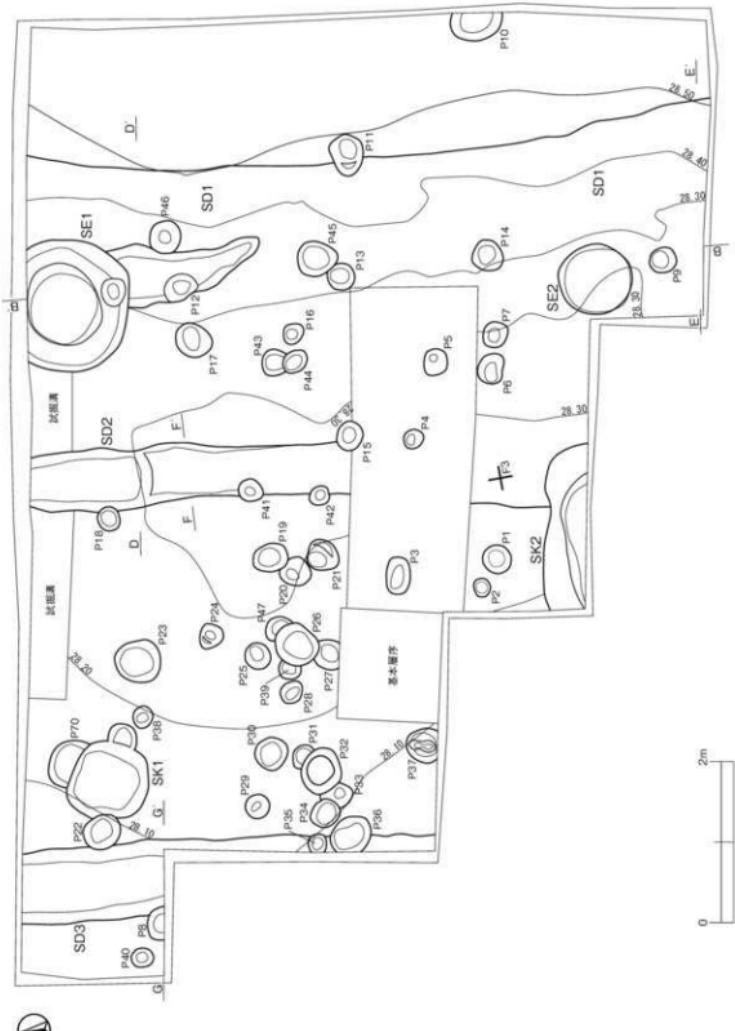
位置 調査区1 A 4区から調査区3 F 3区, 標高 28.3 ~ 28.7 m の台地中央部に位置している。重複関係 第2号溝, 第1・2号井戸, 第4 ~ 7・9・11 ~ 17・41 ~ 46・61 ~ 63号ビットに掘り込まれている。

規模と形状 北部と南部は調査区域外へ延びており, 確認した長さは 24.55 m である。



第8図 調査区2全体図

F3区からN-8°-E方向にほぼ直線的に伸びている。上幅は4.0~5.1mで、断面形は深さ30cmほど
の浅いU字形である。
覆土 単一層。ロームブロックやローム粒子を含む層が全体に堆積しており、
埋め戻されている。
遺物出土状況 覆土中から須恵器片が少量出土している。
所見 第1号井戸に掘り込まれていることから、18世紀中葉以前と考えられる。性格は下市へと向かう水戸街道と
ほぼ平行していることから、道路に関連する溝の可能性がある。



第9図 調査区3全体図

第3表 溝跡出土遺物観察表(1)(第11図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
SD6-4	埋管	—	(1.5)	(1.3)	(1.3)	青銅	火薙郎	覆土中	3%

第2号溝跡（第9図）

位置 F 2 区から D 3 区、標高 28.3 m ほどの台地平坦部に位置している。 **重複関係** 第1号溝跡を掘り込み、第2号土坑、第4・15・18・41・42号ピットに掘り込まれている。 **規模と形状** 北部と南部が調査区域外に延びているため、長さは 6.28 m しか確認できなかった。F 2 区から N-9°-E 方向にほぼ直線的に延びており、上幅 0.65 ~ 0.82 m、下幅 0.44 ~ 0.62 m、深さ 14 ~ 20 cm である。断面形は逆台形である。 **覆土** 単一層。黒褐色土が堆積しており、自然堆積である。 **遺物出土状況** 覆土中から須恵器の小片が少量出土している。 **所見** 時期は第1号溝の西側とほぼ同じ走向であることから、第1号溝が埋め戻された直後の18世紀中葉頃と考えられる。性格は第1号溝と同じで、道に沿った溝の可能性がある。

第3号溝跡（第9図）

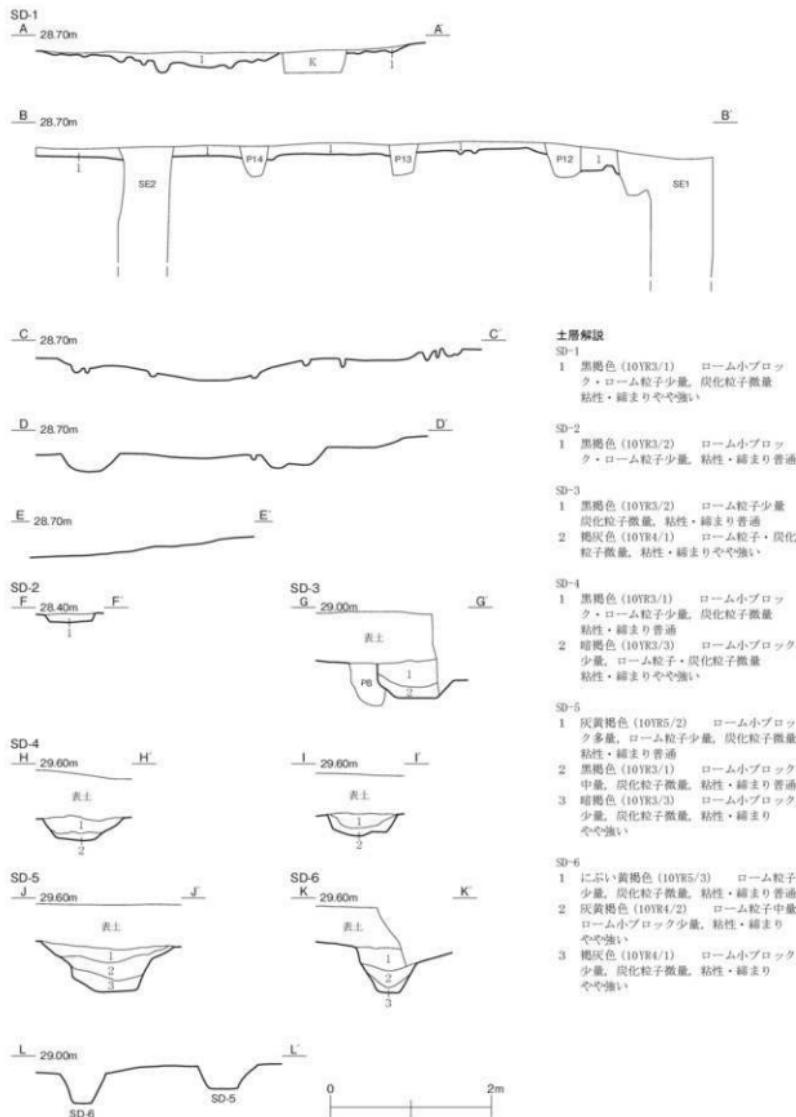
位置 E 2 区から D 2 区、標高 28.1 m ほどの台地の緩斜面部に位置している。 **重複関係** 第8・22・35・36号ピットに掘り込まれている。 **規模と形状** 北部と南部が調査区域外に延びているため、長さは 5.10 m しか確認できなかった。E 2 区から N-7°-E 方向にほぼ直線的に延びており、上幅 0.86 ~ 0.96 m、下幅 0.52 ~ 0.58 m、深さ 22 ~ 34 cm である。断面形は逆台形である。 **覆土** 黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積である。 **遺物出土状況** 覆土中から土師器や須恵器などの小片が少量出土している。 **所見** 第2号溝跡との距離が約 5 m で、ほぼ平行していることから一緒に機能していた可能性がある。道に伴う溝で、18世紀中頃に埋まつたと考えられる。

第4号溝跡（第7・8図）

位置 B 4 区から B 6 区、標高 28.9 m ほどの台地の平坦地に位置している。 **重複関係** 第1号掘立柱建物跡、第69号ピットに掘り込まれている。 **規模と形状** B 6 区を終点とし、西部が調査区域外に延びているため、長さは 6.25 m しか確認できなかった。B 4 区から B 6 区へ N-76°-E 方向にほぼ直線的に延びており、上幅 0.80 ~ 0.88 m、下幅 0.42 ~ 0.52 m、深さ 24 ~ 32 cm である。底面はやや凹凸があり、壁は外傾している。 **覆土** 黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積である。 **遺物出土状況** 覆土中から土師質土器の小皿が 2 点出土している。 **所見** 時期は出土土器から近世と考えられる。性格は不明である。

第5号溝跡（第8図）

位置 B 7 区から C 6 区、標高 28.8 m ほどの台地の平坦部に位置している。 **規模と形状** 南部が調査区域外に延びているため、長さは 7.16 m しか確認できなかった。B 7 区から N-10°-E 方向にほぼ直線的に延びており、上幅 0.76 ~ 1.18 m、下幅 0.54 ~ 0.66 m、深さ 36 ~ 54 cm である。断面形は逆台形である。 **覆土** 覆土中にロームブロックがある程度量含まれており、埋め戻されている。 **遺物出土状況** 搅乱から輪羽口片が出土している。 **所見** 本跡と第6号溝跡との間に 1.1 m ほどの平坦部があり、二つの溝は平行していることから、一緒に機能した可能性があり、通路に伴う溝と考えられる。時期は第6号溝の遺物から 18世紀後葉と考えられる。



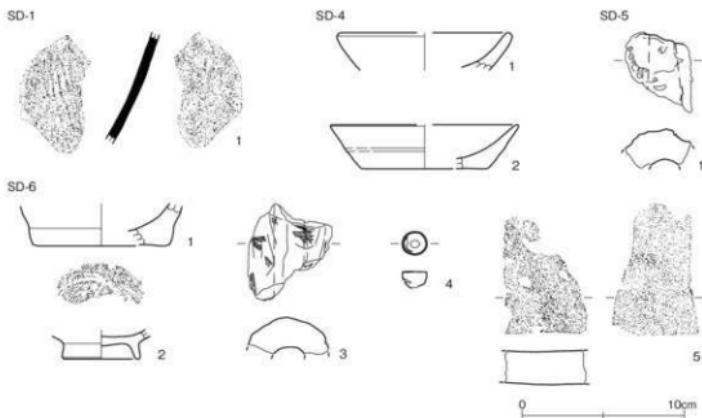
第10図 第1～6号溝跡実測図

第6号溝跡（第8図）

位置 B 6 区から C 6 区、標高 28.8 m ほどの台地の平坦部に位置している。
規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、長さは 6.30 m しか確認できなかった。B 6 区から N -10° - E 方向にほぼ直線的に延びている。上幅 0.64 ~ 0.74 m、下幅 0.32 ~ 0.40 m、深さ 36 ~ 55 cm で、断面形は逆台形である。

覆土 覆土中にロームブロックがある程度量含まれており、埋め戻されている。

遺物出土状況 覆土中から輪羽口片、煙管火皿、搅乱から鉢底部片、肥前焼器手碗片、瓦片などが出土している。
所見 本跡と第5号溝跡との間に 1.1 m ほどの平坦部があり、二つの溝は平行していることから、一緒に機能した可能性があり、通路に伴う溝と考えられる。時期は出土遺物から 18世紀後葉頃と考えられる。

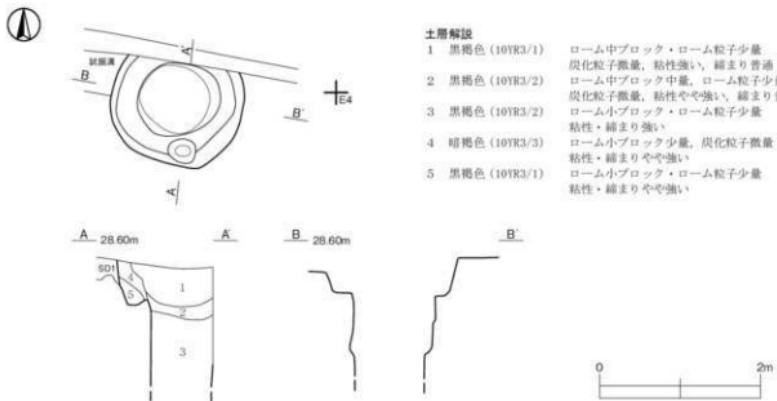


第11図 第1～6号溝跡出土遺物実測図

第4表 溝跡出土遺物観察表（2）（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
SD1-1	須恵器	甕	—	—	—	長石・石英・海綿状骨針	外：黒 内：黄灰	良好	外面平行叩き目	覆土中	5%
SD4-1	土師質土器	皿	(10.4)	C2.35	—	長石・石英・赤色粒子	外・内：にふく（黄根）	良好	外・内面ロクロナデ	覆土中	5%
SD4-2	土師質土器	皿	(11.4)	2.7	(7.8)	長石・石英・チヤー ト・赤色粒子	外・内：	普通	外・内面ロクロナデ 底部ナデ	覆土中	30%
SD6-1	土師質土器	甕	—	(2.6)	(8.4)	長石・石英	外・内：橙	良好	外・内面ナデ 底部ヘラ削り	複疊	5%
SD6-2	陶器	碗	—	(1.8)	(4.6)	細密	外・内：淡黄	良好	透明釉	複疊	5% 肥前 焼器手碗

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
SD5-1	羽口	4.0	(4.0)	(1.9)	C33	長石・石英・チャヤー ト・赤色粒子	外：褐灰 内：浅黄根	外面黒褐色ガラス質淨化	複疊	5%
SD6-3	羽口	(5.6)	(4.9)	(1.8)	C48	長石・石英	外：橙 内：黒褐色	外・内面ナデ 担頭底	覆土中	5%
SD6-5	瓦	(8.0)	(5.1)	(1.9)	C101	長石・石英	外・内：暗青灰	外・内面ナデ	複疊	5%



第12図 第1号井戸跡実測図

3 井戸跡

第1号井戸跡（第12図）

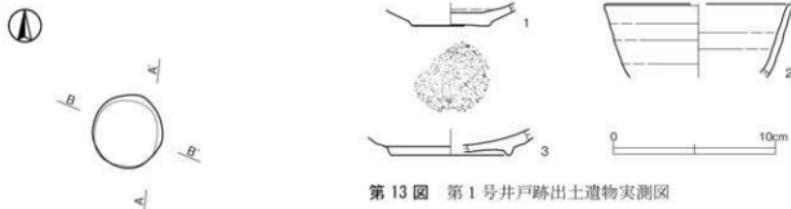
位置 調査区3のE3区からD3区にかけて、標高28.3mほどの台地平坦部に位置している。 **重複関係** 第1号溝跡を掘り込んでいる。 **規模と形状** 北部の一部が調査区域外に延びているが、平面形は径1.64mの円形で、深さは1.65m以上と推定できる。上端から深さ50cmのところに幅25～35cmほどの平場がある。 **覆土** ロームブロックなどをある程度含む黒褐色土が厚く堆積しており、埋め戻されている。 **遺物出土状況** 覆土上層から瀬戸・美濃系の丸碗の破片、覆土中から志野焼の皿の破片・瓦質器片などが少量出土している。 **所見** 時期は出土遺物から18世紀中葉から19世紀前葉頃と考えられる。

第5表 第1号井戸跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉調・焼成	産地	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	—	(1.4)	(4.8)	長石・石英 外:明茶褐色 内:橙	外・内面ロクロナデ 底部回転 糸切り 型づくり成型	良好	不明	覆土中	10%
2	陶器	丸碗	(1.4)	(4.5)	—	緻密 外・内:浅黄褐	体部外・内面:灰釉施釉	釉薬:灰釉 焼成:良好	瀬戸・美濃 半周～180°	10% 18世紀後半	
3	陶器	皿	—	(1.6)	(1.4)	緻密 外・内:灰白	体部外・内面:灰釉施釉	釉薬:灰釉 焼成:良好	瀬戸・美濃	10% 1500～1600 志野	

第2号井戸跡（第14図）

位置 調査区3のF3区、標高28.3mほどの台地平坦部に位置している。 **重複関係** 第1号溝跡を掘り込んでいる。 **規模と形状** 平面形は径0.88～0.92mのほぼ円形で、深さは1.45m以上である。壁はほぼ直立している。 **覆土** ロームブロックなどをある程度含む黒褐色土が厚く堆積しており、埋め戻されている。 **遺物出土状況** 覆土中から須恵器甕の破片が1片だけ出土している。 **所見** 時期を決定づける出土遺物がなく、時期は不明である。



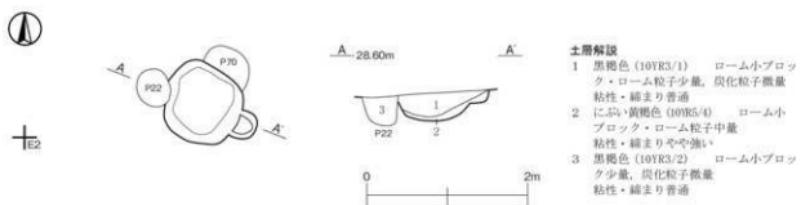
第13図 第1号井戸跡出土遺物実測図



第14図 第2号井戸跡実測図

4 土坑

第1号土坑（第15図）

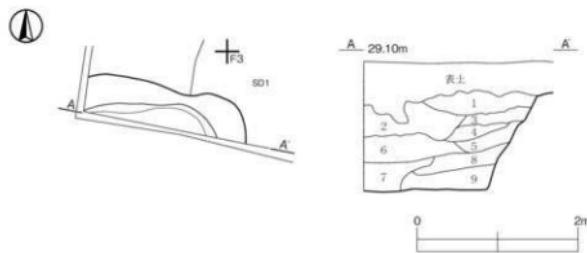


第15図 第1号土坑実測図

位置 調査区3のD 2区、標高28.1mほどの台地平坦部に位置している。
複雑関係 第70号ピットを掘り込み、第22号ピットに掘り込まれている。
規模と形状 長径0.98m、短径0.94mの隅丸方形である。深さは34cmで、底面は皿状である。南西部に径22cm、深さ15cmほどのピットが付随している。
覆土 ロームブロックなどを含む層が堆積しており、埋め戻されている。
所見 出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

第2号土坑（第16図）

位置 調査区3のF 2区、標高28.5mほどの台地平坦部に位置している。
規模と形状 西部と南部が調査区外へ延びているため、確認できた東西幅は2.05m、南北幅は0.60mである。深さは62cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。
覆土 ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。
所見 出土遺物がなく、時期・性格は不明である。



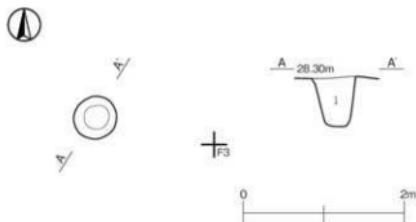
第16図 第2号土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|------------------|--|--------------------|--|
| 1 底黄褐色 (10YR4/2) | ローム粒子少量。炭化粒子微量
粘性強い。締まりやや強い。 | 6 墓褐色 (10YR3/4) | ローム中ブロック中量。ローム粒子少量
炭化粒子微量。粘性・締まりやや強い。 |
| 2 暗褐色 (10YR3/3) | ローム小ブロック・ローム粒子少量
炭化粒子微量。粘性・締まりやや強い。 | 7 にじみ黄褐色 (10YR5/3) | ローム中ブロック中量。ローム粒子少量
粘性強い。締まりやや強い。 |
| 3 暗褐色 (10YR3/4) | ローム中ブロック・ローム粒子少量
粘性・締まりやや強い。 | 8 にじみ黄褐色 (10YR5/4) | ローム粒子少量
粘性強い。締まりやや強い。 |
| 4 褐色 (10YR4/1) | ローム中ブロック中量。ローム粒子少量
炭化粒子微量。粘性・締まりやや強い。 | 9 にじみ黄褐色 (10YR5/3) | ローム小ブロック中量。ローム粒子少量
炭化粒子微量。粘性・締まり強い。 |
| 5 黄褐色 (10YR5/1) | ローム中ブロック中量。ローム粒子少量
粘性・締まりやや強い。 | | |

5 ピット

ピットは調査区3を中心に60基確認したが、建物跡などを想定できるような配置ではなく、遺構の性格も確定できなかったことから、遺物が出土した3基について解説する。そのほかのピットについては、一覧表で規模を報告する。

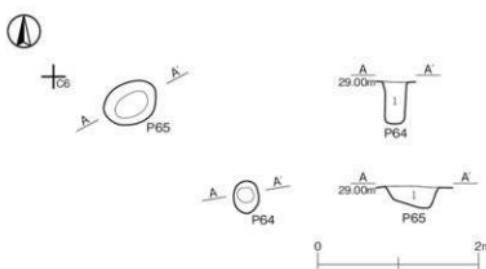


第17図 第1号ピット実測図

土層解説
1 黒褐色 (10YR2/2) ローム粒子少量。炭化粒子微量
粘性・締まりやや強い



第18図 第1号ピット出土遺物実測図



第19図 第64・65号ピット実測図

第1号ピット（第17図）

位置 調査区3のE2区、標高28.1mほどの台地平坦部に位置している。
規模と形状 平面形は径0.52mの円形で、深さは0.60mである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積である。

遺物出土状況 覆土中から土師質土器皿が出土している。

所見 時期は近世と考えられるが、詳細な時期は不明である。

第6図 第1号ピット出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	—	22.7	5.8	長石・石英・海綿状骨針	外・内：にぶい根	良好	体部外・内面クロナデ 全体的に摩耗	覆土中	BK

第64号ピット（第19図）

位置 調査区2のC6区、標高29.0mほどの台地平坦部に位置している。

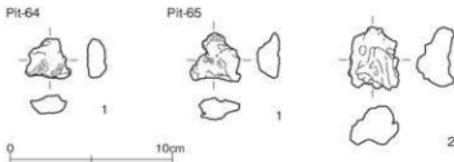
規模と形状 平面形は長径0.44m、短径0.30mの楕円形で、深さは0.50mである。底面は皿状で、壁は直立している。

覆土 黒褐色土が厚く堆積しており、

自然堆積である。

遺物出土状況 覆土中から鉄滓が1点出土している。

所見 時期は近世と考えられるが詳細な時期は不明である。本跡近くの第5・6号溝跡からは輪羽口の破片が、第65号ピットからは鉄滓が出土していることから、近くで鉄生産に関連する遺構があった可能性がある。



第20図 第64・65号ピット出土遺物実測図

第65号ピット（第19図）

位置 調査区2のC6区、標高29.0mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 平面形は長径0.72m、短径0.52mの楕円形で、深さは0.26mである。底面は若干傾斜しており、壁は外傾している。

覆土 黒褐色土が厚く堆積しており、自然堆積である。

遺物出土状況 覆土中から鉄滓が1点出土している。

所見 時期は近世と考えられるが詳細な時期は不明である。本跡近くの第5・6号溝跡からは輪羽口の破片が、第64号ピットからは鉄滓が出土していることから、近くで鉄生産に関連する遺構があった可能性がある。

第7図 第64・65号ピット出土遺物観察表（第20図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	メタル度	特徴	出土位置	備考
P64-1 鉄塊系 遺物	2.4	2.8	1.2	9.2	中	表面が一部アメ状の鉄塊系遺物 気孔あり		覆土中	
P65-1 鉄塊系 遺物	3.0	3.1	1.4	10.4	弱	表面やや流動状の浮をもつ鉄塊系遺物 気孔あり		覆土中	
P65-2 鉄塊系 遺物	3.8	3.1	2.3	19.0	弱	表面がアメ状の鉄塊系遺物 銹懸れによるひび割れ		覆土中	

第8表 ピット計測表

番号	位置	形状	規格(cm)			番号	位置	形状	規格(cm)			番号	位置	形状	規格(cm)		
			長径 (輪)	短径 (輪)	深さ (輪)				長径 (輪)	短径 (輪)	深さ (輪)				長径 (輪)	短径 (輪)	深さ (輪)
2	E2	円形	22	20	24	21	E2	楕円形	42	38	41	40	D1	楕円形	28	25	16
3	E2	楕円形	46	29	25	22	E2	楕円形	47	40	35	41	E3	楕円形	41	28	16
4	E3	円形	25	22	25	23	E2	円形	56	53	51	42	E3	楕円形	26	23	9
5	E3	円形	34	32	36	24	E2	楕円形	32	29	36	43	E3	〔楕円形〕	33	〔24〕	13
6	F3	円形	38	29	27	25	E2	円形	33	31	18	44	E3	楕円形	36	26	18
7	F3	楕円形	34	31	41	26	E2	楕円形	55	52	95	45	E3	楕円形	49	43	40
8	D2	〔楕円形〕	41	〔21〕	52	27	E2	〔楕円形〕	36	〔27〕	32	46	E3	円形	41	39	61
9	F3	円形	33	31	42	28	E2	楕円形	30	25	21	47	E2	〔楕円形〕	34	〔17〕	9
10	F3	〔楕円形〕	64	〔35〕	13	29	E2	円形	30	20	25	53	B2	〔楕円形〕	44	〔21〕	24
11	E3	楕円形	51	31	103	30	E2	楕円形	41	38	29	54	B2	〔楕円形〕	45	〔21〕	16
12	E3	楕円形	41	32	40	31	E2	〔楕円形〕	33	〔17〕	16	55	B3	楕円形	38	34	36
13	E3	円形	33	33	37	32	E2	楕円形	58	49	53	61	B4	楕円形	52	52	36
14	F3	円形	40	37	36	33	E2	〔楕円形〕	41	〔31〕	19	62	B3	楕円形	37	33	44
15	E3	楕円形	36	31	12	34	E2	楕円形	38	33	19	63	B4	楕円形	48	39	46
16	E3	楕円形	28	23	33	35	E2	〔円形〕	22	〔22〕	14	66	C5	楕円形	44	39	17
17	E3	楕円形	47	39	22	36	E2	楕円形	54	45	23	67	C5	楕円形	34	26	26
18	E3	円形	29	26	18	37	E2	〔楕円形〕	43	〔34〕	34	68	B6	円形	30	28	20
19	E2	楕円形	44	35	22	38	E2	楕円形	28	23	22	69	B6	円形	26	23	24
20	E2	楕円形	39	35	35	39	E2	〔楕円形〕	28	〔18〕	9	70	D2	〔楕円形〕	60	〔32〕	20

6 遺構外出土遺物

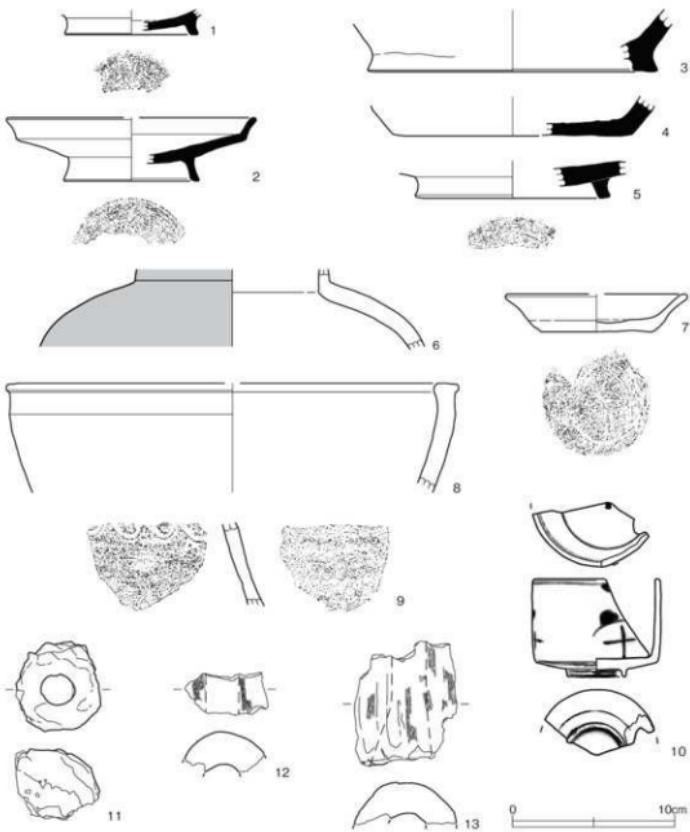
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図（第21図）と観察表を掲載する。

第9表 遺構外出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	高台付杯	—	〔1, 5〕	(8.2)	長石・石英・チャート・滑	外・内: 暗灰黄	良好	底部回転ヘラ削り調整	搅乱	10% 木蓋下窓席
2	須恵器	盤	(15.2)	3.9	(8.4)	長石・石英・海綿状骨針	外:灰 内:黄灰	良好	口縁部一部に盃型 体部外・内面クロナフ 内面に重ね焼き痕。底部回転ヘラ削り	表土	40% 木蓋下窓席
3	須恵器	長頸壺	—	〔3, 8〕	(17.8)	長石・石英・黒色噴き出し	外・内:灰	良好	底部高台貼り付け後ナデ	搅乱	8%
4	須恵器	甕	—	〔2, 4〕	(14.8)	長石・石英・黒色噴き出し	外:灰 内:黄灰	良好	体部下端ヘラ削り 底部ヘラ削り	搅乱	8%
5	須恵器	盤	—	〔2, 3〕	(12.0)	長石・石英・海綿状骨針・黒色噴き出し	外・内: 暗灰黄	良好	底部回転ヘラ削り 高台貼り付け後ナデ	表土	9% 木蓋下窓席
6	灰釉陶器	短頸壺	—	〔4, 9〕	—	長石・石英・黒色噴き出し	外:灰 内:灰リーフ	良好	底部クロ口 盆軸上に自然釉	搅乱	9% 旗投票室
7	土師質土器	皿	(10.8)	2.3	12.0	長石・細砂粒	外・内: にぶい滑	良好	外・内面クロナデ 底部回転糸切り	表土	70%
8	瓦質土器	鏡	(26.4)	〔6, 7〕	—	細砂粒	外・内: 黑褐色	良好	外・内面ナデ	表土	9%
9	陶器	甕	—	—	—	緻密	外:黑 内:灰黄褐	良好	外面弦線による波状文	搅乱	9%

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
10	磁器	筒茶碗	(7.6)	6.0	(3.6)	胎土:緻密 色調:灰白	染付 花卉文	透明釉	肥前	表探	30% 1760~1810

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
11	羽口	〔4, 5〕	(5, 1)	(5, 2)	〔94〕	長石・細砂粒	外:黑 内:灰黄	全体黒色ガラス質化 通風孔径1.9~2.1cm	表土	9%
12	羽口	〔2, 4〕	(4, 9)	〔2, 0〕	〔24〕	長石・細砂粒	外:にぶい滑	外・内面ナデ	表土	9%
13	羽口	〔7, 1〕	(6, 3)	(2, 0)	〔104〕	長石・砂粒	外:にぶい滑 内:灰黄褐	外・内面ヘラナデ	表土	9%



第21図 遺構外出土遺物実測図

第10表 出土遺物集計表

遺構名	出土位置	縄文土器		弥生土器		土師器		須恵器		陶磁器（中世以降）				破片 總數	土器片 重量 (g)	土製品 (g)	金屬 製品 (g)	備考	
		中期	後期	不明	中期	後期	不明	古墳	新良・ 平安	古墳	新良・ 平安	陶器	磁器	土師質	瓦質	瓦			
SB-1	覆土																1(259)		
SD-1	覆土							1		2							3	37	
SD-2	覆土									4							4	124	
SD-3	覆土							5		3	1						9	95	
SD-4	覆土		1		1	2	13		13	1		7					38	217	
SD-5	覆土	i						1		4							6	100	2(46)
SD-6	覆土	i						5		4			2	4			15	201	1(19) 煙管 1(1)
SD-6	撲乱	i								1	1		2		2	7	285	1(48)	
SE-1	覆土							5		2	2		2	7	2	20	422		
SE-2	覆土									1							1	1	
SP-1	覆土											2					2	18	
SP-8	覆土											2					2	8	
SP-14	覆土											1					1	3	
SP-22	覆土											1					1	6	
SP-64	覆土								1								1	9	鉄滓 1(9)
SP-65	覆土																		鉄滓 2(28)
撲乱	—								6	4		1	2			13	695	2(98)	
表土	—								6				1	2	9	682	1(26)		
表採	—										1					1	54		
総数		2	1		1	2	30		47	9	1	29	14	6	133		8	4	

第IV章　まとめ

第1節　土地利用の概観

大鋸町遺跡は、1985年の調査において遺跡の東部を調査し、弥生時代後期後半の十王台式から古墳時代前期への過渡期を示す土器群が出土した遺跡として著名である（井上 1988）。その後、2004年には1985年の調査区の西部に隣接した地区を調査し、古式須恵器が出土するなど（斎藤・新垣 2005），縄文時代から古墳時代、奈良・平安時代に至る大きな集落跡であることが分かっている。

当遺跡の西側境界は、県道長岡水戸線（旧江戸街道）である。今回の調査区は、その県道から東側に60～70m離れ、県道にはほぼ平行して下市へと向っている市道に接している。本調査区は当遺跡の西端部に当たり、標高29mの台地平坦部に位置している。本調査区では、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物は確認されていない。本調査区の近くを調査した2008年の調査（石丸・閑口・渥美 2009）においても縄文時代から古墳時代の遺構は確認されておらず、当遺跡の西端部は縄文時代から古墳時代には土地利用されていなかったと考えられる。

本調査区では奈良・平安時代の遺構は確認されなかつたが、木葉下窓跡群産の比較的保存状態が良好な高台付壺・盤などが出土している。2008年の調査では奈良・平安時代の堅穴建物跡4軒、掘立柱建物跡1棟が確認され、この時代には当遺跡のほぼ全体が土地利用されていたと考えられる。2008年の調査では、二面庇を有する掘立柱建物跡や「大家尺」・「南」と墨書きされた土器、コップ形土器などが出土し、官衙的遺跡と指摘されている。当遺跡における奈良・平安時代の堅穴建物跡は、これまでに30軒以上確認されている。また、当遺跡から北西へ約500mのところに位置する薬王院東遺跡（井上 1990）でも38軒の堅穴建物跡が確認されている。この地域は、当遺跡の北側に隣接する安楽寺遺跡を含めて、那賀郡廿二郷の一つである吉田郷に比定されている。このことは、線刻壁画で有名な7世紀中葉頃に比定されている吉田古墳、常陸國三宮とされる式内社の吉田神社やその神宮寺とされる薬王院がこの地区に存在し、古墳時代終末期から奈良・平安時代にかけて、当地域が当地の有力者の力を背景とした那賀郡の一中心地域であったことを示している。実際、那賀郡の郡寺とされている台渡里廃寺跡からは郡内の各郷から貢納されたと考えられる瓦が出土している。その中に「吉田」とヘラ書されている瓦が何点かあり、「吉田郷」の存在を知ることができる。

2008年の調査では、当遺跡の西部を北西から南東方向へ向かう幅7.8m、深さ1.9mほどの大溝が検出され、中世のもとして報告されている。中世の城郭として、当遺跡から北東へと延びる細長い舌状台地上に吉田城跡があり、常陸大掾氏系の吉田氏が平安末期に館を構えたとの伝承がある。吉田氏とその一族の石川氏・馬場氏は鎌倉御家人の地頭職として在地を支配していたことが知られている。2004年の当遺跡東部の調査では、青磁・白磁・かわらけなども出土しており、大溝の存在や出土遺物から、当遺跡は、中世の遺構の存在が推定され、隣接する場所にある吉田城に関する曲輪などの施設があった可能性がある。

第2節 当遺跡における近世遺構と江戸街道

今回の調査で、時期を推定できた遺構は溝跡が18世紀中葉以前のもの1条、18世紀中葉から後葉のもの4条、18世紀中葉から19世紀前葉にかけての井戸1基で、すべて近世のものである。今回の調査区は、当遺跡の西端部に位置し、江戸街道にはほぼ平行して下市へと向かう脇道に接した場所である。本節では近世における当遺跡の様相と江戸街道について述べ、まとめとする。

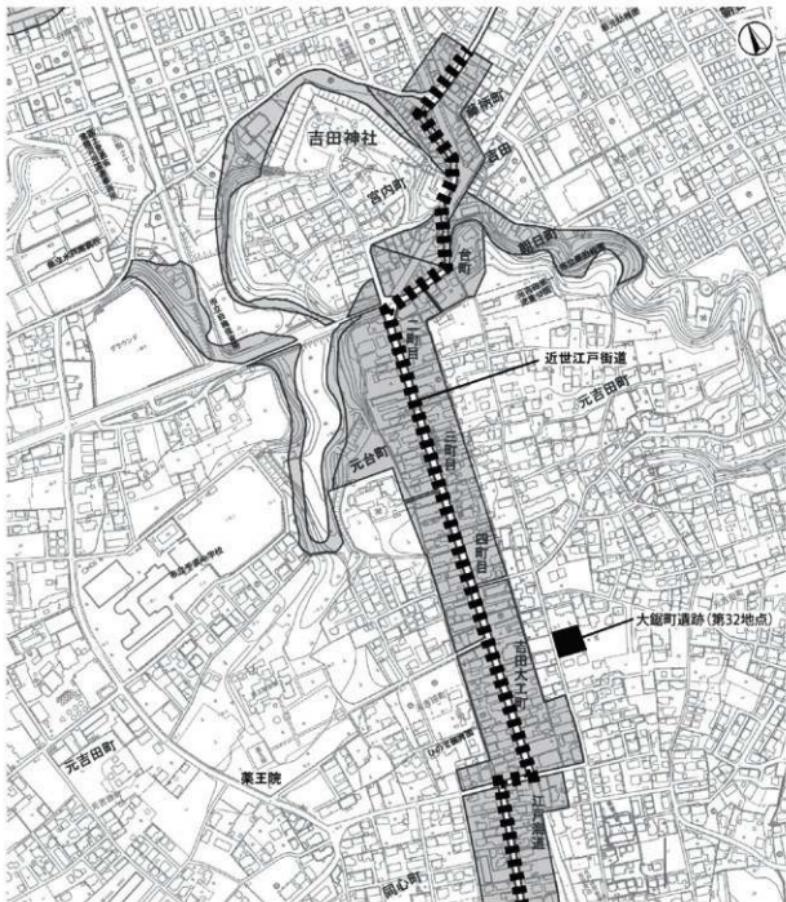
当初の江戸街道は、「長岡(茨城町)から小吹(水戸市)を経由しており、長岡から吉田経由になったのは、「田町越」で下町が開かれた後の慶安元年(1648)で、この街道が開発されてからこの地も発展し、万治元年(1659)3月の間口帳に始めて吉田台町の名が出て来る」(1982 江原)という。

江戸街道に接して東側に位置する当遺跡については『新編常陸国誌』(1976 宮崎報恩会編)巻四都邑水戸下市付録の条には「大鋸町 於賀麻知」「横町ノ東端ヨリ左ニ走ル所ニテ、即大工町ノ東裏ナリ、モト木挽職ノ輩、多ク住セシニ因テ、町名トナリシナルベシ、以上並ニ吉田ノ郷地ナリ」とある。近世後期に大鋸町は吉田大工町の東側に確実に存在し、「木挽職」が多く住んでいたのである。また、『水戸城下図』では、吉田神社の南側、江戸街道沿いの吉田大工町までを城下とし、図に載せている。江戸街道を南から辿っていくと街道が鉤の手に曲がるところから薬王院入口までが吉田大工町、薬王院入口から吉田神社までが臺町となっている。吉田大工町の東側の下市へ向かう脇道との間が「大鋸町」である。今回の調査区は脇道の東側で、車塚の南側に当たる。検出された溝の走向は真北から約10° 東へ振れており、脇道と平行している。掘立柱建物もほぼその向きであり、18世紀後葉頃には調査区から下市へ向かう通路があり、脇道側には「木挽職」の住まいが並んでいたと考えられる。本調査区は近世後期の街道に平行してあった吉田大工町の東側に存在した近世「大鋸町」の東端部に当たるようである。

そして、19世紀前葉頃には溝や井戸は埋まり、「大鋸町」は再編成されたようである。 (海老澤)

引用・参考文献

- 1 濵美賢吾 川口武彦 2011『台渡里3－平成19～21年度長者山地区範囲確認調査概報－』水戸市埋蔵文化財調査報告第33集 水戸市教育委員会
- 2 石丸敦史 関口慶久 濱美賢吾 2009『大鋸町遺跡(第8地点)宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第27集 水戸市教育委員会 島帆ハウス株式会社 有限会社毛野考古学研究所
- 3 伊東重敏 1969「茨城における弥生文化終末についての試論」『茨城考古学』第2号
- 4 伊東重敏 1971『水戸市埋蔵文化財埋蔵地基本調査報告書(応急版)』水戸市教育委員会
- 5 井上義安 1988『水戸市大鋸町遺跡(仮称)元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市大鋸町遺跡発掘調査会
- 6 井上義安 1990『薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市薬王院東遺跡調査会
- 7 茨城県教育委員会 2000『茨城県遺跡地図』
- 8 茨城県教育庁文化課編 1986『重要遺跡調査報告書III』茨城県教育委員会
- 9 江原忠昭編 1982『水戸の地名－地理と歴史－』水戸市



第22図 大鋸町遺跡（第32地点）と近世江戸街道との位置関係図

(水戸観光コンベンション協会提供 一部改変 1/6,000)

- 10 川口武彦 2008a「水戸市百合が丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号

11 川口武彦 2008b「茨城県水戸市台渡里廃寺長者山地区・大串遺跡第7地点」『古代交通研究会第14回大会アズマの国の道路と景観』

12 川口武彦・色川順子・渥美賢吾 2011『台渡里4-1宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里64次)ー』水戸市埋蔵文化財調査報告第38集 水戸市教育委員会

- 13 斎藤 洋・大賀 健・新垣清貴ほか 2005『大綱町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財発掘調査報告第3集 水戸市教育委員会
- 14 佐々木藤雄・閑口慶久・大橋 生ほか 2006『大綱町遺跡（第3地点）－市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第7集 水戸市教育委員会
- 15 閑口慶久編 2006『吉田古墳I 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次調査』水戸市埋蔵文化財調査報告第6集 水戸市教育委員会
- 16 高井悌三郎 1964『常陸台渡廬寺跡・下總結城八幡瓦窯跡』総芸社
- 17 中山信名修 栗田寛補 宮崎報恩会版 1976『新編常陸国誌』
- 18 橋本勝雄 2002「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』茨城県考古学協会 茨城旧石器シンポジウム実行委員会 ひたちなか市教育委員会
- 19 日沖剛史・石丸敦史・川口武彦・色川順子ほか 2008『薄内遺跡（第1地点）－移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』水戸市埋蔵文化財調査報告第18集 水戸市教育委員会
- 20 水戸市史編纂委員会 1963『水戸市史』上巻 水戸市役所

写 真 図 版

図版 1



1 調査区遠景（南西から）



2 調査区近景（南東から）

図版2



1 調査前状況



2 調査区1全景



3 調査区2全景



4 調査区3全景



5 調査区1・3全景



6 基本土層



7 第1号溝跡 確認状況（南から）



8 第1号溝跡 土層堆積状況（西から）

図版3



1 第1号溝跡 完掘状況（北から）



2 第2号溝跡 完掘状況（北から）



3 第4号溝跡 完掘状況（南西から）



4 第1号井戸跡 土層堆積状況（西から）



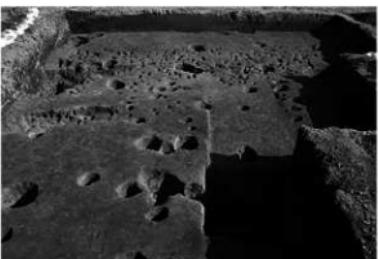
5 第1号井戸跡 完掘状況（東から）



6 調査区1終了状況（西から）

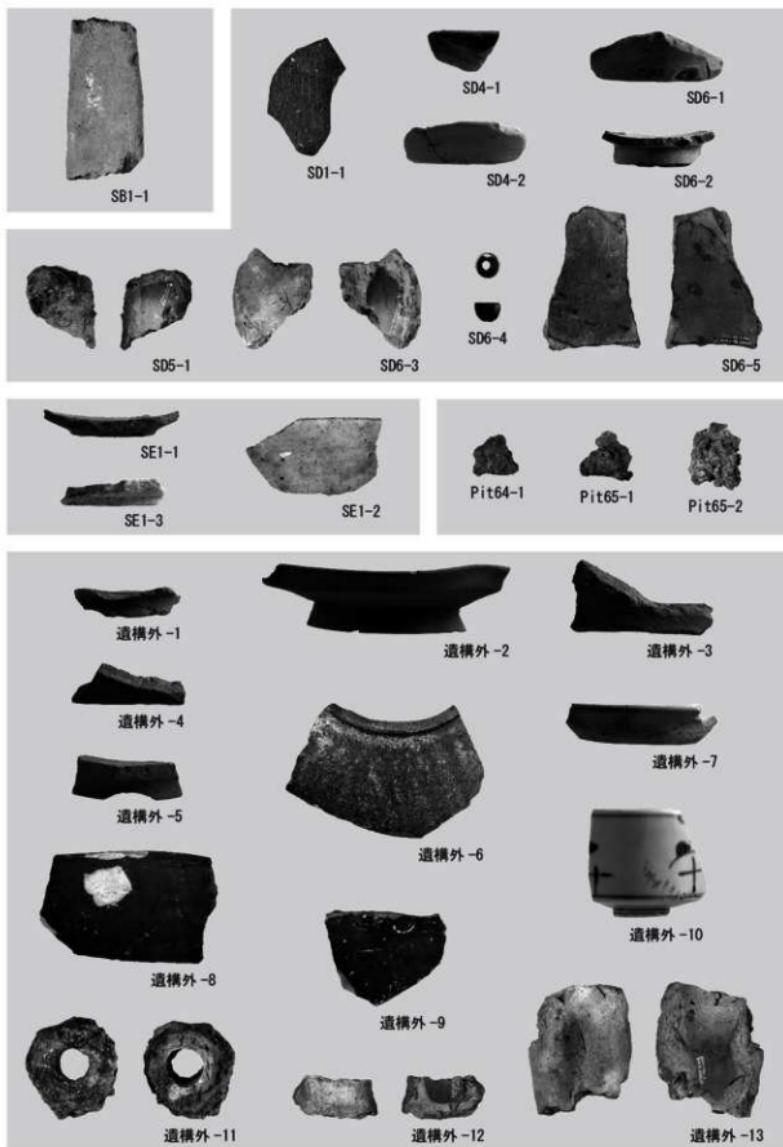


7 調査区2終了状況（西から）



8 調査区3終了状況（西から）

図版4



出土遺物写真

抄 錄

水戸市埋蔵文化財調査報告 第88集

大鋸町遺跡（第32地点）

－元吉田町地内建売住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷 平成29（2017）年6月16日

発行 平成29（2017）年6月23日

編集 有限会社毛野考古学研究所 茨城支所

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社高野高速印刷

〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122

TEL. 029-305-5588